

小沼丹作品集
II



小沼丹作品集Ⅱ

定價三八〇〇圓

昭和五十五年二月十五日 初版發行

著者 小 沼 丹

發行者 長谷川郁夫

發行所 株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二―五―十二 郵便番號二〇二

電話 東京(〇三)二六三―九二一八(代表)

印刷 精興社 製本 大口製本

裝釘 山高登

©T. Onuma, 1980 Printed in Japan

目次

不思議なソオダ水

不思議なソオダ水

マダムの階段

赤い帽子

木犀

遠い顔

女雛

乾杯

二人の男

不可侵條約

焼餅やきの幽霊

194 173 150 128 120 104 81 64 37 9

黒いハンカチ

指輪

眼鏡

黒いハンカチ

蛇

十二號

靴

スクエア・ダンス

赤い自轉車

手袋

シルク・ハット

時計

384 367 351 335 318 302 284 268 252 236 219

犬
解題

419 401

小沼丹作品集

Ⅱ

不思議なソオダ水

不思議なソオダ水

マノ・マモル氏は謹嚴實直の士である。

マノ・マモル氏は鼻下に八字髭を蓄へてゐる。蓋し、今日にあつて八字髭なんか生やしてゐるのは謹嚴實直の士に決つてゐるのである。黒い洋服を着て、八字髭をひねつてゐるマノ氏を見ると、人は何やら十九世紀邊りの人間の前にゐる氣がして懷舊の情を禁じ得ないかもしれぬ。

マノ・マモル氏の日常生活は極めて規則正しい。朝は決つて五時半に起き、上廁し、五時四十五分には齒を磨いてゐる。六時には食卓に向ひ……等等、よしんばカント氏と迄は行かぬだらうが、その日常生活の正確な運行は、毎晩酒を飲み宿醉などに悩まされてゐる徒輩に慚愧の念を起させずにはゐない。かう云ふ人物を謹嚴實直の士と呼ぶとして、他の何人に謹嚴實直なる形容詞を冠し得ようか？

マノ・マモル氏は獨身である。尤も一度結婚したことはあるが、細君は結婚して二年目に、マノ氏以外の男性に好意を覺えたものらしく出奔してしまつた。その理由に就いては、諸説紛紛として容易に真相が掴めない。マノ・マモル氏自身、口を噤して語らない。因みに申添へるが、謹

嚴實直の士なる者は常に「沈黙は金」なる格言の遵奉者であることを忘れてはならない。しかし、細君がマノ氏の許を去るとき、或る信すべき筋に洩らしたと云ふ言葉に依ると、

——あんな味氣無い生活、眞平だわ。

と、細君は云つたと云ふ。蓋し、女性に味氣無い思ひをさせる者こそ、正真正銘の謹嚴實直の士と斷定して差支へないのである。その後、既に二十年近い年月が經つて、マノ・マモル氏は四十五歳である。その間、マノ・マモル氏に就いて、女性に關する噂を耳にした者があつたらお眼に掛りたい。

マノ・マモル氏は……いや、これ以上、マノ氏の謹嚴實直なることを證明する必要があるまい。氏は既に二十年に亙つて、或る私立高等學校で國語を教へてゐる。その間、マノ・マモル氏が授業を休んだのは、二回しか無い。一度は郷里の父親が死んだとき、一度は腦病院を逃出した氣狂に、學校からの歸途、棍棒で足を拂はれたときである。このときマノ氏は足を挫き入院したが、擔架で運んで呉れば授業すると云ひ張つて當局者を大いに感激させ且つ當惑させた。

何故、氣狂はマノ氏に危害を加へたか、これは后になつて判つたことであるが、その腦病院にマノ氏と同じやうに八字髭を生やした患者がゐて、例の氣狂はその患者に日頃大分痛め附けられてゐたのである。マノ氏の名譽のために附加して置くが、マノ氏は決して頭が變挺な譯では無い。また、同じく八字髭を蓄へてゐると云つても、腦病院の髭は無論謹嚴實直の士と呼ばれるべきではない。

しかし、世間にはマノ・マモル氏のやうな尊敬すべき存在に對してすら、兎角注釋を加へたが

る小人共が齡くない。

——マノさんが女に子供を産ませたら、太陽が西から昇るだらう。

——沈香も焚かず屁もひらずと云ふ所かね。

——人生、何が愉しくて生きてゐるんだらうか？

なぞ愚劣なことを云つていい氣になつてゐる手合は、到底、謹嚴實直の士を理解し得ない無縁の末輩と云ふべきである。

二月の或る寒い日のことである。マノ・マメル氏の家を訪客があつた。マノ・マメル氏は六十ばかりの婆やと二人、郊外の部屋敷が四つの家に住んでゐる。婆さんが出てみると、肥つて赦ら顔の男が名刺を出してマノ氏に面會を求めた。名刺にはアキヤマ・ゴンベイとあつて、住所はマノ氏の郷里と同じ北國の町が刷込んである。

マノ氏は在宅してゐた。と云ふことはその日が日曜だつたことを意味する。マノ氏は茶の間の炬燵で日曜日の日課の午睡をしてゐた。謹嚴實直の士と雖も午睡ぐらゐはするのである。婆さんは名刺を持つてマノ氏の傍に行き、

——もしもし、旦那様。

と聲を掛けた。しかし、婆さんが起す必要は無かつた。と云ふのは、玄關の客が突然大聲で怒鳴つたから。

——おい、マノ君、俺だよ、アキヤマ・ゴンベイだよ。

マノ氏は眼を醒した。しかし、一時間の豫定の午睡を三十四分でちよん切られたので、明らかに不満らしい顔をした。これは五十八分でちよん切られても同じことである。マノ氏は婆さんの出した名刺を見て、ちよいとばかり不思議さうな顔をした。マノ氏が玄關に出て行くと玄關のアカヤマ・ゴンベイは大聲で笑つて、やあ、久し振りだなとか元氣かとか云つたが、マノ・マモル氏は鹿爪らしい顔をして、ふむと點頭くに過ぎなかつた。しかし、アカヤマ・ゴンベイは一向に氣を悪くする氣配も無かつた。

——相變らず、難しい顔をしてゐるな。ちよつと上らせて貰ふぜ。

と、マノ氏の許可も得ず勝手に靴を脱いで上つて來た。

——一體、とマノ氏は云つた。何の用事かね？

——こりや御挨拶だな、全く君らしい。しかし、玄關ぢや話も出來ん。君の家には客間ぐらゐあるんだらう？

さう云ひながら、アカヤマ・ゴンベイは持參した包をマノ氏に差出した。それをマノ氏は一向に嬉しさうな顔もせず受取つて訊ねた。

——これは何だね？

——いや、そこらで買つて來た菓子さ。つまらんもんだ。

マノ氏は婆さんに包を渡しながらか云つた。

——お土産ださうだ。そこらで買つて來たつまらん菓子ださうだ。

それから、主客はマノ氏の書齋の火鉢を眞中に話をした。と云つても喋るのは専らアカヤマ・

ゴンベイばかりで、マノ氏は難しい顔をして八字髭をひねつてゐるのである。アキヤマ・ゴンベイの話と云ふのはかうである。アキヤマ・ゴンベイはマノ氏と同郷で同じ中學を出て、更に東京の或る私立大學に共に籍を置いた間柄である。尤も、マノ氏は國文科に學んだが、アキヤマ・ゴンベイは商科を出て、郷里で父祖傳來と稱する大きな呉服屋をやつてゐる。

そのアキヤマ・ゴンベイの息子アキヤマ・カンタロオが、今年高等學校を卒業して大學に入ることになった。父親も本人も、父親の母校なるA大學入學を希望してゐるが、それは試験が終つてみないと判らない。それが駄目なら、もつと易しい大學に入れるだけのことである。兎も角、どこか大學に入つたとなると息子を東京に住まはせねばならない。

——それで、とアキヤマ・ゴンベイはマノ氏の顔を見た。これからが肝腎の用件なんだが、ひとつ、君の所に置いては貰へまいかな？

マノ氏はちよいと吃驚した顔をした。

——何故かね？

アキヤマ・ゴンベイは何のためか頭を掻いた。マノ氏は學生時代から、謹嚴實直居士であつた。しかし、アキヤマ・ゴンベイは、青春を享樂すべきだと考へた。青春を享樂する道は校門に通ずるには非ずして紅灯の巷に通ずるものであると思ひ込んだ。或は、錯覺した。その結果、次つぎと五人の女性と大いに親しくなり、父親の財布を軽くすることに専心したため、大學を卒業するのに六年の歳月を必要としたほどである。更に、その裡の二人はアキヤマ・ゴンベイの愛の結晶——と、これは女性が云つたのである——が出来たと稱し、當時のアキヤマ一家を天手古舞させ

るほどの熱意を示した。

——君も承知のやうに、とアキヤマ・ゴンベイは珍しく神妙な顔をした。俺の二の舞はやらせたくないでね。

それに父親のゴンベイ氏から見ると、どうも息子カンタロオには多分に父親の血を引いてゐると思はれる節がある。そのカンタロオを一人東京に置いて神妙にせよと云つても、それは云ふ方が無理である。須く、先手を打つて、二の舞を演じないで済む環境を與へるに若くは無い。それには、謹嚴實直そのものであるマノ・マメル氏に息子を依頼するのが最も賢明の策であると思はれる。

ざつと以上のやうなことを云つて、アキヤマ・ゴンベイは頭を下げた。

——ひとつ、宜しく頼む。

四月になると、マノ・マメル氏の家にアキヤマ・ゴンベイの息子カンタロオが同居することになった。と云ふことは、カンタロオが大學に入學したことを意味する。尤も、A大學の三つの學部を受けて全部失敗し、B大學を失敗し、最後にC大學に辛うじて滑り込んだのである。

カンタロオを連れて來たとき、アキヤマ・ゴンベイは云つた。

——まあ、學校なんてどこでもいいんだよ。要するに本人の心掛次第だからね。

息子のカンタロオは父親の傍に畏つて坐り、ひどく神妙な恰好をしてゐた。その様子を見ると、親父のゴンベイが心配してゐるやうな不良性の兆候は、とんと看取出來なかつた。カンタロオは